武蔵野日曜聖書講筵

信交実存
――テモテ前書第２～６章――

１９９２年７月12日
小池辰雄

信交実存　キリストの真相　無限者・無者　罪の贖い　ミステリオンの信交　福音は伝えざるを得ないもの　自分自身が聖書になっている「０×０＝１」

【テモテ前2】

1 然れば、われ第一に勧む、凡ての人のため、王たち及び凡て権を有つものの為におのおの願い、祈祷、とりなし、感謝せよ。2 是われら敬虔と謹厳とを尽して安かに静かに一生を過ごさん為なり。3 斯くするは美事にして、我らの救主なる神の御意に適うことなり。4 神は凡ての人の救われて、真理を悟るに至らんことを欲し給う。5 それ神は唯一なり、また神と人との間の中保も唯一にして、人なるキリスト・イエス是なり。6 彼は己を与えて凡ての人の贖価となり給えり、時至りて証せらる。7 我これが為に立てられて宣伝者となり、使徒となり（我は真を言いて虚偽を言わず）また信仰と真とをもて異邦人を教うる教師となれり。

8 この故に、われ望む。男は怒らず争わず、何れの処にても潔き手をあげて祈らんことを。9 また女は恥を知り、慎みて宜しきに合う衣にて己を飾り、編みたる頭髪と金と真珠と価貴き衣とを飾りとせず、10 善き業をもて飾りとせんことを。これ神を敬わんと公言する女に適える事なり。11 女は凡てのこと従順にして静かに道を学ぶべし。12 われ女の教うることと男の上に権を執ることとを許さず、ただ静かに為べし。13 それアダムは前に造られ、エバは後に造られたり。14 アダムは惑されず、女は惑されて罪に陥りたるなり。15 然れど女もし慎みて信仰と愛と潔きとに居らば、子を生むことに因りて救わるべし。

【テモテ前3】

1 『人もし監督の職を慕わば、これよき業を願うなり』とは、信ずべき言なり。2 それ監督は責むべき所なく、一人の妻の夫にして、自ら制し、慎み、品行正しく、旅人を懇ろに待し、能く教え、3 酒を嗜まず、人を打たず、寛容にし、争わず、金を貪らず、4 善く己が家を理め、謹厳にして子女を従順

ならしむる者たるべし。5（人もし己が家を理むることを知らずば、争でか神の教会を扱うことを得ん）6また新たに教えに入りし者ならざるべし、恐らくは傲慢になりて悪魔と同じ審判を受くるに至らん。7外の人にも令聞ある者たるべし、然らずば誹謗と悪魔の羂とに陥らん。

8執事もまた同じく謹厳にして、言を二つにせず、大酒せず、恥ずべき利をとらず、9潔き良心をもて信仰の奥義を保つものたるべし。10まづ彼らを試みて責むべき所なくば、執事の職に任ずべし。11女もまた謹厳にして人を謗らず、自ら制して凡ての事に忠実なる者たるべし。12執事は一人の妻の夫にして、子女と己が家とを善く理むる者たるべし。13良く執事の職をなす者は良き地位を得、かつキリスト・イエスに於ける信仰につきて大なる勇気を得るなり。

14われ速かに汝に往かんことを望めども、今これらの事を書きおくるは、15若し遅からんとき人の如何に神の家に行うべきかを汝に知らしめん為なり。神の家は活ける神の教会なり。真理の柱、真理の基なり。16実に大なるかな、敬虔の奥義『キリストは肉にて顕され、霊にて義とせられ、御使たちに見られ、もろもろの国人に宣べ伝えられ、世に信ぜられ、栄光のうちに上げられ給えり』

【テモテ前４】

1然れど御霊あきらかに、或人の後の日に及びて、惑す霊と悪鬼の教えとに心を寄せて、信仰より離れんことを言い給う。2これ虚偽をいう者の偽善に由りてなり。彼らは良心を焼金にて焼かれ、3婚姻するを禁じ、食を断つことを命ず、されど食は神の造り給える物にして、信じかつ真理を知る者の感謝して受くべきものなり。4神の造り給える物はみな善し、感謝して受くる時は棄つべき物なし。5そは神の言と祈りとによりて潔められるるなり。

6汝もし此等のことを兄弟に教えば、信仰と汝の従いたる善き教えとの言にて養わるる所のキリスト・イエスの良き役者たるべし。7されど妄なる談と老いたる女の昔話とを捨てよ、また自ら敬虔を修行せよ。8体の修行もいささかは益あれど、敬虔は今の生命と後の生命との約束を保ちて凡ての事に益あり。9これ信ずべく正しく受くべき言なり。10我らは之がために労しかつ苦心す、そは我ら凡ての人、殊に信ずる者の救主なる活ける神に望みを置けばなり。

11汝これらの事を命じかつ教えよ。12なんじ年若きをもて人に軽んぜられるな。反って言にも、行状にも、愛にも、信仰にも、潔きにも、信者の模範となれ。13わが到るまで、読むこと勧むること教うる事に心を用いよ。14なんじ預言によりて賜わりたる賜物を等閑にすな。15なんじ心を傾けて此等のこと

を専ら務めよ。汝の進歩の明かならん為なり。16なんじ己とおのれの教えとを慎みて此等のことに怠るな、斯くなして己と聴く者とを救うべし。

【テモテ前5】

1老人を譴責すな、反って之を父のごとく勧め、若き人を兄弟の如くに、2老いたる女を母の如くに勧め、若き女を姉妹の如くに全き貞潔をもて勧めよ。3寡婦のうちの真の寡婦を敬え。4されど寡婦に子もしくは孫あらば、彼ら先ず己の家に孝を行いて親に恩を報ゆることを学ぶべし。これ神の御意にかなう事なり。5真の寡婦にして独り残りたる者は望みを神におきて、夜も昼も絶えず願いと祈りとを為す。6されど佚楽を放恣にする寡婦は、生けりと雖も死にたる者なり。7これらの事を命じて彼らに責むべき所なからしめよ。8人もし其の親族、殊に己が家族を顧みずば、信仰を棄てたる者にて、不信者よりも更に悪しきなり。9六十歳以下の寡婦は寡婦の籍に記すべからず、記すべきは一人の夫の妻たりし者にして、10善き業の声聞あり、或は子女をそだて、或は旅人を宿し、或は聖徒の足を洗い、或は悩める者を助くる等、もろもろの善き業に従いし者たるべし。11若き寡婦は籍に記すな、彼らキリストに背きて心乱るる時は、嫁ぐことを欲し、12初の誓約を棄つるに因りて批難を受くべければなり。13彼等はまた懶惰に流れて家々を遊びめぐる、啻に懶惰なるのみならず、言多くして徒事にたずさわり、言うまじき事を言う。14されば若き寡婦は嫁ぎて子を生み、家を理めて敵に少しにても謗るべき機を与えざらんことを我は欲す。15彼らの中には既に迷いてサタンに従いたる者あり。16信者たる女もし其の家に寡婦あらば、自ら之を助けて教会を煩わすな。これ真の寡婦を教会の助けん為なり。

17善く治むる長老、殊に言と教えとをもて労する長老を一層尊ぶべき者とせよ。18聖書に『穀物を碾す牛に口籠を繋くべからず』また『労動人のその価を得るは相応しきなり』と云えばなり。19長老に対する訴訟は二三人の証人なくば受くべからず。20罪を犯せる者をば衆の前にて責めよ、これ他の人をも懼れしめんためなり。21われ神とキリスト・イエスと選ばれたる御使たちとの前にて厳かに汝に命ず、何事をも偏り行わず、偏頗なく此等のことを守れ、22軽々しく人に手を按くな、人の罪に与かるな、自らを守りて潔くせよ。23今よりのち水のみを飲まず、胃のため、又しばしば病に罹る故に、少しく葡萄酒を用いよ。24人の罪は明かにして先だちて審判に往き、或人の罪は後にしたがう。25斯くのごとく善き業も明かなり、然らざる者も遂には隠るること能わず。

【テモテ前6】

1おおよそ軛の下にありて奴隷たる者は、おのれの主人を全く尊ぶべき者とすべし。これ神の名と教えとの譏られざらん為なり。2信者たる主人を有てる者は、その兄弟なるに因りて之を軽んぜず、反って彌増々これに事うべし。その益を受くる主人は信者にして愛せらるる者なればなり。

汝これらの事を教えかつ勧めよ。3もし異なる教えを伝えて、健全なる言すなわち我らの主イエス・キリストの言と、敬虔にかなう教えとを肯わぬ者あらば、4その人は傲慢にして何をも知らず、ただ議論と言争とにのみ耽るなり、之によりて嫉妬・争闘・悪しき念おこり、5また心腐りて真理をはなれ、敬虔を利益の道とおもう者の争論おこるなり。6然れど足ることを知りて敬虔を守る者は、大なる利益を得るなり。7我らは何をも携えて世に来らず、また何をも携えて世を去ること能わざればなり。8ただ衣食あらば足れりとせん。9されど富まんと欲する者は、誘惑と羂、また人を滅亡と沈淪とに溺らす愚かにして害ある各様の慾に陥るなり。10それ金を愛するは諸般の悪しき事の根なり、ある人々これを慕いて信仰より迷い、さまざまの痛みをもて自ら己を刺しとおせり。

11神の人よ、なんじは此等のことを避けて、義と敬虔と信仰と愛と忍耐と柔和とを追求め、12信仰の善き戦闘をたたかえ、永遠の生命をとらえよ。汝これが為に召しを蒙り、また多くの証人の前にて善き言明をなせり。13われ凡ての物を生かしたもう神のまえ、及びポンテオ・ピラトに向かいて善き言明をなし給いしキリスト・イエスの前にて汝に命ず。14汝われらの主イエス・キリストの現れたもう時まで、汚点なく、責むべき所なく、誡命を守れ。15時いたらば幸福なる唯一の君主、もろもろの王の王、もろもろの主の主、16これを顕し給わん。主は唯ひとり不死を保ち、近づきがたき光に住み、人の未だ見ず、また見ること能わぬ者なり。願くは尊貴と限りなき権力と彼にあらんことを、アァメン。

17汝この世の富める者に命ぜよ。高ぶりたる思いをもたず、定めなき富を恃ずして、唯われらを楽しませんとて万の物を豊かに賜う神に依り頼み、18善をおこない、善き業に富み、惜しみなく施し、分け与うることを喜び、19斯て己のために善き基いを蓄え、未来の備えをなして真の生命を捉うることを為よと。

20テモテよ、なんじ委ねられたる事を守り、妄なる虚しき物語また偽りて知識と称うる反対論を避けよ。21或る人々この知識を装いて信仰より外れたり。

願くは御恵み、なんじと偕に在らんことを。

●信交実存

テモテ書は教会の牧会の書簡で、我々に直接関係しているような内容ではない。しかし、その中の言葉で、ただ、パウロの精神はつかむことはできますので、読んでいきます。どうぞ、我々は歴史的な或る大事な課題を荷なっている集会ですから、私が仆れるまでご協力ください。そう簡単に仆れませんから、ご安心ください。大きな仕事をもっていますから。

それでは、第2章から、

「信交実存」

と題してお話します。

テモテ一人にあてた手紙ですけれども、あなた方一人ひとりに当てた手紙として、牧会ではなく、その中の信交実存の内容の言葉をつかんでください。聖書は、そういう読み方をして一向差し支えない。パウロはこの時の必要に応じて、

「これだけの事を牧会的には言っておかないと、ゴタゴタになるから」

という意味で、懇ろに書いたわけです。そういうことは、我々のこの集会では、別に必要ないのだから、こんな事は一々読む必要はない。ただ

「昔はこうだったから」

で、結構なんです。その中の大事な節を、これから拾いながら、学んでいきたいと思います。

1然れば、われ第一に勧(すす)む、凡ての人のため、王たち及び凡て権を有(も)つもの為におのおの願い、祈祷(いのり)、とりなし、感謝せよ。

パウロは、

「**権を有(も)つもの**」

ということをよく言う。ロマ書にも出てますけれども。

「権威を有つ者は神さまから権威をもらっているのだから、それにはよく従え」

というようなことを、非常によく言う。ところが、実際は、権威ある者は神さまからの権威と思っているのはほとんどいない。そういった権威者がいかにやっつけられるかは、黙示録に書いてあります。本当の権威は、権威者自身が平伏(ひれふ)していなければ、本当の権威は使えない。フリードリッヒ大王という人は本当の王者だった。

「自分は国家の第一の僕である」

という自覚をもっていた。私は、ドイツのフリードリッヒ大王は本当に大王の名前に値すると思っています。ゲーテが生まれる少し前の人です。

2是われら敬虔(けいけん)と謹厳とを尽して安(やすら)かに静かに一生を過ごさん為なり。3斯くするは美事(よきこと)にして、我らの救主(すくいぬし)なる神の御意(みこころ)に適(かな)うことなり。

パウロみたいに波瀾万丈の生涯を送らせられながら、言っていることは実に、

「静かに敬虔を尽くして生涯を送れ」

と。こんなことをパウロが言ったかと思うくらいな言葉です。「謹厳」とは、謹み深いこと。傲慢はサタンですから。

●キリストの真相

4 **神は凡ての人の救われて、真理を悟るに至らんことを欲し給う。**

この「悟る」という字は、「エピグノーシン」という字が使ってあって、深い霊的な認識のことをいいます。この「真理」という言葉が、どうも躓きになる。福音の世界は「理」ではない。キリストは、

「我はまことなり」

というのは「アレーテイア」という字がギリシア語では使ってある。真理という言葉は観念的に響く。

「真理」という言葉は素晴らしい言葉で、藤井先生が非常に好きな言葉だった。藤井先生は福音という言葉よりも真理という言葉の方が好きなんだ。原理的な真理的なという角度ではなくして、私に言わせると、この「アレーテイア」「真理」という言葉は、むしろ

「真相」

真の相と訳す。もちろん、内的な相です。

「キリストは真の像である」

という、「像」という字は「エイコーン」という字が使ってある。

「神の像」

という、あの相なんです。これは、もちろん霊相であり、内相である。霊的なすがた、内的なすがた。これがアレーテイアの本当の内容です。

「我は真相なり」

という真相です。絶対に外貌ではない。キリストの外貌は福音書にも書いてない。

「どんな顔をして、背がどれいらくいで、目がどうだった」

とか、そんなことは一つも書いてない。素晴らしいです、福音書というのは。何か、そういう事が一箇所でもあるかと思えば、ひとつもないでしょ。そういう事は問題にしてない。キリストの言葉も、なさっている行為も、全部これは、真相が、根源から来ているところの事態が現れているだけです。

だから、我々クリスチャンも、

「われを見よ」

ということが、本当の意味で言えなくてはいけない。

「外側ではないぞ、われというのは」

と。だから、ペテロもそう言ったでしょ。

「なぜ、私を見るか。我が内なるキリストの名をお前に与える」

と。名は実である。パウロもペテロもヨハネもみんな使徒たちはキリストの真相を内に宿している。ヨハネ伝15章に書いてあるように、幹に連なっている。幹に連なっているから、生命が通っている。そういうのが、この「真相」の世界です。「真理」ではない。理（ことわり）ではない。理屈ではない。

「概念的にどうだこうだ」

という事を並べることではない。そういう掴み方を本当にしなくては。そういう掴み方のできた大詩人はゲーテなんです。

賀川豊彦がそういう人だった。そして、それを現した。内村鑑三の流れはインテリ階級に聖書研究をやっていた。内村先生自身の中にはそうでない要素もあるけれども。先生の文章には力があることは、その面なんです。それでもなお、一つを欠いた。それは、使徒達の次元からはズレたということ。

だから、４節は本当は、

「神は凡ての人の救われて、真相を霊的に把握することに至らんことを欲し給う」

ということ。これは予定論でも何でもない。パウロははっきり言っている、

「凡ての人を」

と。福音は無条件の世界だから、

「どういう人は救われない」

なんてことはない。十字架上の片一方の盗賊も最後にはキリストに、

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

と、救われてしまった。

●無限者・無者

5**それ神は唯一なり、また神と人との間の中保（なかだち）も唯一にして、人なるキリスト・イエス是（これ）なり。**

５節は素晴らしい言葉です。天地創造の、人類救済の神はただひとり。その中保もただ一人、キリストです。

「我によらずば、父に行くことができない」

と、はっきり、キリストが言っておられる。だから、カトリックの構造は要らない。マルティン・ルターの宗教改革は、

「信仰は、神―キリスト―聖霊―我という直結の関係で、ローマ法王だとか何とかは一つも要らない。カトリックはカトリックのその特色はあるけれども、あのヒアラルヒーは、宗教的な構造は要らない」

と。それはルターの言うとおりです。ところが、今度は、新教自身がまたいろいろ、段階をつくっている。

人の集まりというものは、或る一つの構造がないと続かないという面があるものだから、止むを得ないということも言えますけれども。そうかというと、無教会みたいに、何もなくて、全く個人的な集まりで、本当のコイノニア、交わりがなくて、ただ聖書の研究で、ヘブライ語やギリシア語を一生懸命にやる。これもまた困ったものだ。無教会は、形式的な教会に対して、ひとつの歴史的な役割はあったけれども、それは内村先生の時だけで結構なんで、やはり、一つの

「キリストの体」

としてのそれぞれの集会があるべきなんだ。いわゆる集会をやっていても、我々のような有機体的な人格的な霊的な交わりというものが、その協力というものが、どうも無教会の方はないがしろになっている。大体、「無教会」という言い方自身が、歴史的な意味はあっても、いつまでもこだわる必要はないわけだ。

「人なるキリスト・イエス是なり」

これは、人となった「キリスト・イエス」ということ。「キリスト」というのは

「油そそがれたる者」

という霊的な存在のことです。「イエス」というのは人間的な言葉ですから。

「キリスト・イエス」

――「イエス・キリスト」でもどっちでもいいですけれども――という言い方は大事なことだ。キリストだけでも、イエスだけでもダメ。

「キリスト・イエス」というのは、

「相対的な存在でありながら、絶対的なものをもっている」

という意味です。

「油そそがれたる者」（キリスト）

というのは霊的な存在です。「イエス」は

「無者」

なんです。「キリスト」は

「無限者」

なんです。だから、「イエス」は十字架、「キリスト」は復活して天界にあるところの無限的存在です。キリスト・イエスというのはそういう気持ですから。それが、

「神にして人なる」

という、正に神人、神の人なんだ。

●罪の贖い

6 **彼は己を与えて凡ての人の贖価（あがない）となり給えり、時至りて証せらる。**

「己を与えて」とは、十字架にかかったこと。この「贖価（あがない）」というギリシア語はもともと、

「お金でもって償なうところのもの」
という字なんだ。買い取るんだ。私はこういう表現は嫌いだ。そんなものじゃない。お金とは全然無関係ないんだ。「あがない」という、こういう言葉を使うのは本当はおかしい。ドイツ語では、
「Lösegeld（身のしろ金）」
という、贖うところのお金なんだ。「アンチルトロン」という妙な字ですけれども。そうじゃない。
「生命をもって血を流して、死なない生命を、本当の義の生命を与える」
ということ。それは旧約の、羔を屠って罪の贖いをした。あれが本当なんだ。それをキリストがやったので、
「買い取った」
なんていう意味の字ではない。このギリシア語はよくない。罪の贖いは、買い取れるものではない。これは生命の問題だから。
仏教の方では、そういうことがなくて、ただ大慈大悲ですけれども。

7我これが為に立てられて宣伝者となり、使徒となり（我は真を言いて虚偽を言わず）**また信仰と真とをもて異邦人を教うる教師となれり。**

いろいろなことを言っているけれども、その「真理」「真」という字が、そういう内容であるということを、皆さん、つかみそこなわないでください。
「原理」
ではないんだ。冗談じゃない。

8この故に、われ望む。男は怒らず争わず、何れの処にても潔き手をあげて祈らんことを。

男はすぐ怒ったり争ったり、それが男の悪い癖なんだ。

9また女は恥を知り、慎みて宜しきに合う衣にて己を飾り、編みたる頭髪と金と真珠と価貴き衣とを飾りとせず、10善き業をもて飾りとせんことを。これ神を敬わんと公言する女に適える事なり。

「善き業」とは愛の業です。

11女は凡てのこと従順にして静かに道を学ぶべし。12われ女の教うることと男の上に権を執ることとを許さず、ただ静かに為べし。13それアダムは前に造られ、エバは後に造られたり。

これは神話だけれども、パウロはそんなことを書いている。

14アダムは惑されず、女は惑されて罪に陥りたるなり。

女性は、楽に受けとる方は、いい意味においては、信仰にスッとよく入れる。男は理屈ぽいからなかなか信仰に入らない。それと同じように、今度は、簡単に受けとって、「原理研

究会」に簡単に惑わされてしまう。それで、とんでもないことになる。

15**然れど女もし慎みて信仰と愛と潔きとに居らば、子を生むことに因りて救わるべし。**

「子を生むことに因りて救わるべし」

とはちょっと言いすぎな言葉です。

「では、子を生まなければ救われないか」

なんて、そういう意味ではない。ユダヤの社会では、子がない事は非常に、災いとまでいかなくとも、悲しい事で、子を生むことが大事だったけれども、今の世の中は、余り生まれては困るんだ。

●ミステリオンの信交

3章です。

1**『人もし監督の職を慕わば、これよき業を願うなり』とは、信ずべき言なり。2それ監督は責むべき所なく、一人の妻の夫にして、自ら制し、慎み、品行正しく、旅人を懇ろに待し、能く教え、3酒を嗜まず、人を打たず、寛容にし、争わず、金を貪らず、4善く己が家を理め、謹厳にして子女を従順ならしむる者たるべし。5（人もし己が家を理むることを知らずば、争でか神の教会を扱うことを得ん）**

今度は監督のことが書いてある。そんな事はどうでもいい。ただ、その中で2節の、

「旅人を懇ろに待し」

ということは大事な言葉です。

「旅人を懇ろにもてなすような気持がなかったらいかん」

と。「酒を嗜まず」云々と、いろんなことが書いてある。

6**また新たに教えに入りし者ならざるべし、恐らくは傲慢になりて悪魔と同じ審判を受くるに至らん。7外の人にも令聞ある者たるべし、然らずば誹謗と悪魔の羂とに陥らん。**

傲慢と悪魔は同義語です。悪魔は傲慢なる存在。奢りたる心が悪魔になる。だから、傲慢になると、高慢になると、そいつは悪魔の手下だということを思わなくては。神の前に本当に平伏す人、キリストの前に平伏す人は本当の権威をいただく。ところが、普通の権威者はその謙虚がない。だから、とんでもないことになる。

8**執事もまた同じく謹厳にして、言を二つにせず、大酒せず、恥ずべき利をとらず、9潔き良心をもて信仰の奥義を保つものたるべし。**

「言を二つにせず」とは二枚舌はダメということ、もちろんそうです。「潔き良心」とは、日本語がおかしい。もともと「潔き意識」という字です。「信仰の奥義を保つ」、これは大事な

ことです。「ミステリオン」、本当の「奥義」がないものは信仰ではない。その奥義の現実は、

「われキリストの中に、キリストわがうちに」

という、この現実がミステリオンの現実です。だから、交わる「信交」と書いた。信交とはミステリオンの世界です。その

「キリストと一つになっているミステリオンの信交から出てくる実存」

のことを、要するに語っているわけです。いろんな細かいことを言っているけれども、それを新しい福音的な律法だと思ったらダメです。パウロは懇ろに語っているだけの話です。我々には関係ないことがたくさんある。監督も執事も要らない。「ディアコノス」というのは執事のことです。

13 **良く執事の職をなす者は良き地位を得、かつキリスト・イエスに於ける信仰につきて大（おおい）なる勇気を得るなり。**

「良く執事の職をなす者は良き地位を得」なんていうことは、どうだっていいんだ。大したことない。

14 **われ速（すみや）かに汝に往かんことを望めども、今これらの事を書きおくるは、**
若（も）し遅からんとき人の如何（いか）に神の家に行うべきかを汝に知らしめん為なり。
神の家は活ける神の教会なり。真理の柱、真理の基（もとい）なり。

「神の家」という不思議な言い方がしてある。教会のことです。教会という言い方はあまり関心しない。むしろ神の家の方がいい。

「エクレシア」

「教会」という字はもともと神さまに

「呼び出された者たちの群」

という意味だから、「教会」という言葉自身がおかしな訳なんだ。教えの会だなんて。歴史的にこういう熟語になってしまっているから、仕方がないけれども。真理の柱とは、キリストという真相の、霊相の柱です。

16 **実（げ）に大なるかな、敬虔の奥義『キリストは肉にて顕され、霊にて義とせられ、**
御使たちに見られ、もろもろの国人（くにびと）に宣（の）べ伝えられ、世に信ぜられ、栄光の
うちに上げられ給えり』

「キリストは肉にて顕され」は、ヨハネ伝1章に出ている。我々と同じ肉体的存在で顕れてきたが、その中には神の霊がある。そして、神の霊をもって、神と一つとなって、御意を行じているから、それが義です。「霊にて義とされ」とはそういうことです。義人は他にいない。キリストだけ。最後には「栄光のうちに上げられ」た。その通り。

●福音は伝えざるを得ないもの

4章です。

1然れど御霊あきらかに、或人（あるひと）の後の日に及びて、惑す霊と悪鬼の教えとに心を寄せて、信仰より離れんことを言い給う。

ちゃんと予見している。やがてそんな事になるのがある、聖霊でその事はもう分かっている、と。白き悪鬼がいるんだ、偽預言者が。

2これ虚偽（いつわり）をいう者の偽善に由りてなり。彼らは良心を焼金（やきがね）にて焼かれ、3婚姻するを禁じ、食を断つことを命ず、

いかにも良さそうだがダメだ、と。

されど食は神の造り給える物にして、信じかつ真理を知る者の感謝して受くべきものなり。4神の造り給える物はみな善し、感謝して受くる時は棄つべき物なし。5そは神の言と祈りとによりて潔（きよ）められるるなり。

それはその通り。キリストもそのように言われた。キリストは、いわゆる禁欲ではない。神さまの与えたもうものを自然にいただいたら、一向差し支えない。それを余り人工的に加工して、妙なことにしてしまって困ったものです。大自然は自然に循環している、その法則を文明が破ってしまっている。それだから、すべてがおかしなことになる。

『エン・クリスト』誌には、いろんな人の体験の証言が私は欲しい。だから、遠慮なしに、各召団の人が書いてもらいたい。余り書きすぎても困るけれども。大体、1頁から2頁ぐらい。全召団の雑誌なんだから。私は主筆だけれども、分量はだんだん少なくしていきます。「独和対照」は私は続けて書きますけれども、これは仕方がない。

12なんじ年若きをもて人に軽んぜられるな。反って言にも、行状にも、愛にも、信仰にも、潔（きよ）きにも、信者の模範となれ。

自分で模範なんて思わなくたって、模範というものは自然に模範になる。

とにかく、この福音は正直、伝えざるを得ないものです。しまって置いたら、腐ってしまう。だから、誰でもが伝道者なんです。伝道の仕方は、一人一人自由自在で、どうでもいいです。とにかく、本当のことを伝えたいわけです。

14なんじ預言によりて賜わりたる賜物を等閑（なおざり）にすな。

その通り。

とにかく、第十巻（『聖書は大ドラマである』１９８８年刊）は本当によく読んでください。あれはもう旧約から全部、新約の魂で書いていますから。あれ一冊をマスターしたら、もう楽に話せます。それくらい、第十巻は大事な一巻です。私は、いわゆる解説的、説明的にはものを言ってない。すべて断言的な告白なんです。福音は告白せざるを得ない。キリストもお釈迦さんも教えていたのではない。告白してた。

パウロさんの時には、これだけの事を言う必要があった。それから、今の教会にもある程度こういうことを言わなくてはならない。我々はそういう教会とは違うんだから、そんなものは要らない。皆さんは、中心をしっかり捕まえるから、そこから自然に霊的な法則

が出てくる。それで生きてください。ということは、普通の人が、
「どうも、あれはおかしい」
なんていう、そういうおかしさでは決してない。そういうおかしさではダメです。

●自分自身が聖書になっている

５章です。

1老人を譴責すな、反って之を父のごとく勧め、若き人を兄弟の如くに、
そんなことは当たり前だ。ところが、悪いのがいるんだ。面白いことが書いてある。
老いたる女を母の如くに勧め、若き女を姉妹の如くに全き貞潔をもて勧めよ。
これは結構なことです。
3寡婦のうちの真の寡婦を敬え。4されど寡婦に子もしくは孫あらば、彼ら先ず己の家に孝を行いて親に恩を報ゆることを学ぶべし。これ神の御意にかなう事なり。
と、随分詳しいこと書いてあるな。まぁ、あなた方、味わうところは味わってくださいよ。
5真の寡婦にして独り残りたる者は望みを神におきて、夜も昼も絶えず願いと祈りとを為す。
なかなか立派なことです。
「未亡人」という言葉はあまりよくない。未だ亡くならない人、早く逝け、なんて。冗談じゃないよ、あの未亡人という言葉は。
17善く治むる長老、殊に言と教とをもて労する長老を一層尊ぶべき者とせよ。
こんなことも関係なし。長老はいないのだから。長老的な人はここにいらっしゃいますけれども、別に我々は長老なんていう言葉は使わないのだから。
22軽々しく人に手を按くな、人の罪に与かるな、自らを守りて潔くせよ。
それはその通りだ。こちらが聖霊に満ちてないで手を按いたりしたらいかん。
23今よりのち水のみを飲まず、胃のため、又しばしば病に罹る故に、少しく葡萄酒を用いよ。
「少しく」だよ。用い過ぎてはダメだよ。
６章です。
6然れど足ることを知りて敬虔を守る者は、大なる利益を得るなり。
「利益を得るなり」はどうでもいい。「足ることを知る」というのは大事なことだ。結局、そういう人が健全なんです。貪っていたら、お互いに自縄自縛になる。
7我らは何をも携えて世に来らず、また何をも携えて世を去ること能わざればなり。

その通り。向こう側には聖書も持っていくわけにいかん。聖書は、もう自分自身が聖書になっていなくては。聖書をよく、棺桶の中に入れて一緒に焼いてしまう人がある。私はそんなことはさせないから。大事な聖書だから。私が愛読した聖書は、後でまた使ってもらわなくては。

10**それ金を愛するは諸般（もろもろ）の悪しき事の根なり、ある人々これを慕いて信仰より迷い、さまざまの痛みをもて自ら己を刺しとおせり。**

その通り。善用すればいい。善用するのなら、一向差し支えない。金儲けを金儲けのためにやって、享楽のためにやったらダメだ。善用の為なら、いくら金を儲けたっていいよ。善く使えばいいんだ。

11**神の人よ、なんじは此等のことを避けて、義と敬虔と信仰と愛と忍耐と柔和とを追求め、12信仰の善き戦闘（たたかい）をたたかえ、永遠の生命をとらえよ。汝これが為に召しを蒙（こうむ）り、また多くの証人の前にて善き言明（いいあらわし）をなせり。**

「神の人よ」

と、パウロはテモテにはっきり言っている。11、12節は、パウロがこういっているんだということは、あなた方一人一人が覚えていい言葉です。

新約聖書には無駄がない、と言ったけれども、テモテ前後書の中には我々にとっては無駄な言葉がたくさんある。その時には、無駄ではなかったんだろうけれども。ガラテヤ書だの、ロマ書だの、コリント前後書――多少、あそこにも無駄はあるけれども――とにかくガラテヤ書、ロマ書なんてのは絶対に無駄がない。福音書はいうまでもなく。ヘブル書も無駄がない。

●「０×０＝１」

14**汝われらの主イエス・キリストの現れたもう時まで、汚点（しみ）なく、責むべき所なく、誡命（いましめ）を守れ。15時いたらば幸福（さいわい）なる唯一の君主、もろもろの王の王、もろもろの主の主、これを顕し給わん。**

キリストはそういう方だ、と。

「もろもろの王の王、もろもろの主の主」

なんて、そういうのと桁が違う。質が違う。そんな言い方はあまり関心しない。キリストという人は比較されるような質のものではないですから。比較を絶している霊止（ひと）です。第一人者でなくて、唯一者なんです。その唯一者が本当の無者であった。世界中にいないね、キリストのことを「無者」だなんて言っているのは。だから、私は

「０＝∞」（ゼロ・イコール・無限大）

と書く。こういう数学があるかね。これは何を表しているか。キリストを表している。

「０×０＝１」

これは何のことですか。太陽は無色です。水も無色です。無色の光が無色の水滴に当たると、七色の虹が生ずる。ゼロ×ゼロが一。一が本当は無限大なんだ（1＝∞）。一の無限大。これが虹です。キリストのゼロがやってくると、無限色が現ずる。だから、無限に真理が湧いてくる。まことなるものが。

私は詩が書ききれないな、とても。大変だな。まだ、最後的構造はできてないけれども。言葉が言葉にならない。

16 **主は唯ひとり不死を保ち、近づきがたき光に住み、人の未だ見ず、また見ること能わぬ者なり。願くは尊貴（とうとき）と限りなき権力（ちから）と彼にあらんことを、アァメン。**

これは素晴らしい言葉だ。テモテ前書の6章16節というのはもの凄い言葉だ。平伏します、この言葉は。こういう一言を本当にくらわなければいかん。こういう一言を瞑想しているとグーッと聖霊がくるから。あなた方、そういう読み方をしないのか。私は今、異言が出そうで困っている。もの凄い光を放っている、この言葉自身が。驚嘆驚倒して読まなくてはいかん。

17 **汝この世の富める者に命ぜよ。高ぶりたる思いをもたず、定めなき富を恃（たのま）ずして、唯われらを楽しませんとて万の物を豊かに賜う神に依り頼み、**
18 **善をおこない、善き業に富み、惜しみなく施し、分け与うることを喜び、**
19 **斯（かく）て己のために善き基いを蓄え、未来の備えをなして真の生命を捉（とら）うることを為（せ）よと。**

そう言いなさいと、懇ろに語っている。

20 **テモテよ、なんじ委ねられたる事を守り、妄（みだり）なる虚（むな）しき物語また偽りて知識と称うる反対論を避けよ。**

そんなものは相手にするな、と。

21 **或る人々この知識を装いて信仰より外（はず）れたり。**

願くは御恵（み）み、なんじと偕に在らんことを。

皆さんも是非とも一対一の伝道をしてください。『エン・クリスト』の大事な号でもやって、

「とにかくこれを読みなさい」

と。人が本当の世界に入るのを見るほどうれしいことはない。私は一番うれしいのはそのことです。